

ふるさとの和算を伝えたくて

鳴海 風

算額がよい例だが、和算(江戸時代に発達した日本の数学)の遺産はほぼ全国に分布している。それが多い地域では、県単位の和算研究会がある。2005年以來、毎年どこかの県で、全国和算研究大会が開催されてきたが、たいいてい地元の和算研究会が準備をした。

2019年7月、私は、岩手県和算研究会の菅原通会長から、次のように頼まれた。

「2年後に秋田大会をやりたい。事務局は当会が担当するが、大会長は、秋田ゆかりの鳴海風さん、あなたにやってほしい」

秋田県に和算研究会はない。しかし、江戸時代には岩手と秋田の和算家の交流があったので、菅原会長にとって秋田は研究対象である。私にとっても、秋田は小中高時代を過ごした心のふるさとであり、機会があれば算額のある神社を訪ね、小説にも書いていた。名前だけの大会長ではいけないと思った私は、他県の研究者だけでなく、秋田の人々に秋田の和算の魅力と価値を知ってもらうことを自らの使命にした。

そのためには、秋田にいる和算関係者の協力を得るのが一番だが、やがて壁にぶつかった。私は愛知県に住んでいるので、秋田の知人や同級生らと一緒に調べていくと、かつての愛好家や研究者は、既に亡くなっているか、高齢で活動を停止していて、後継者も育っていないことが分かってきたのである。

一方、新型コロナの流行が始まり、2020年に開催予定だった長野大会が中止になった。翌年の秋田大会までに流行が終息するとは思えないが、準備だけは進めなければならない。土地勘があり地元で顔のきく高校の同級生二人(大地、森)が菅原会長の強力な助っ人となって、会場やホテルの選定と予約、予算の見積もりなどをしてくれた。

その後新型コロナは蔓延の波状攻撃を繰り返し、やはり秋田大会は開催困難となった。中止に

なった長野大会は、長野県和算研究会があるから、いつかはまた開催できる。しかし、和算研究会のない秋田の場合は、その保証がない。私は中止でなく順延にしたかった。そこで、菅原会長とともに、翌2022年に予定されていた東京大会の事務局にお願いをし、開催をゆずってもらった。

菅原会長とは、一年延期だけでなく、私の使命についても相談していた。その結果、一般向けの「市民講座」を同時開催することになった。内容は秋田の和算をテーマにした展示と講演である。

展示の目玉は、秋田県人で有名な方陣作家、阿部楽方氏(大会時は94歳になる)の2メートル四方もある224方陣である。出展の交渉は菅原会長にお願いした。

講演では、私は遊歴算家の山口和を取り上げることにした。和の2回目の遊歴では秋田を旅していた。そして、『数学文化』に連載したその小説が、幸いにも秋田大会前に出版されるからだ。

私は「市民講座」のポスターを自らデザインして制作した。それを関係者に郵送したり、SNSで公開したりするだけでなく、大会の1か月前に、空路秋田入りし、母校を始め各地をレンタカーで回りながら配った。

本大会のプログラムでは、仙北市角館町の西長野神社の算額見学がある。打合せのため、5年ぶりに同神社を訪れた私は、そこで耳寄りな話を聞いた。1年前に秋田大学の若い先生が学生を連れて見学に来たというのだ。情報はその程度で、自宅に戻ってから、その若い先生を特定し、連絡をとろうと思った。

大会初日(2022年11月5日)、高校の同級生二人(工藤、林)がさらに応援に加わり、私の「市民講座」の展示室には、中学の同級生四人(櫻井、菅原、植村、佐藤)が詰めた。

9時の開場から、見学者が続々と展示室に入ってきた。その中に、大会直前に連絡ができた秋田大学の先生(数学が専門)が二人の学生と一緒にいた。講演後は菅原会長にも紹介でき、今後、岩手県和算研究会と交流することを約束してくれた。ふるさとの和算を伝えるための、小さな火をともしることができた。

(なるみ・ふう／作家)